

ユダヤ教の基礎にあるもの

ステイバー・E・ラングナス
山崎達也 訳

一 イスラエル——民族

「ヘブライ人」「イスラエル人」そして「ユダヤ人」という言葉は、歴史のなかでしばしば混同され、しかも同じ意味としても使用されてきた。聖書はアブラハムのことを「イブリ」(עברי)すなわち「ヘブライ人」と呼んでいるが、それは「もう一方の側から」という意味である。これはおそらく、彼がユーフラテス川のもう一方の岸、すなわち東岸から移住してきたからであろう。このことから、アブラハムの十二人の息子とそ

の子孫が、イスラエルの子、イスラエル国民あるいはイスラエル民族と呼ばれるようになったのである。

「ユダヤ人」という言葉は、ヤコブの息子たちのなかでもっとも優秀であった「ユダ」に由来している。「ユダヤ人」は、西暦という紀元前七二二年、北王国イスラエルの滅亡をユダ王国で耐えて生き抜いてきた民族全体を総称する名前となった。そこで今日では、民族をユダヤ、信仰をユダヤ教、言語をヘブライ語、土地をイスラエルと呼ぶことにしている。

民族としてのイスラエルは、およそ三千八百年前に

生きていた、ヘブライ人のアブラハムの系統を引く一部族として始まった。この部族は、アブラハムによって唱導された一神教的信仰と彼によって結ばれ、その子孫によって絶え間なく更新されてきた「神の契約」に基づく、特殊な信仰の信者という特徴をもっていた。しかしこの部族は、この信仰を排他的なものにしようとしたわけではなく、実はまったくの逆であつて、他の信仰をもっている人々をもこの信仰に招き入れようと努めていたのである。

神に満たされたこの一族と、彼らに与^よした部族の数が増えていった。彼らは、トーラー⁽²⁾を神から与えられた自分たちの根本法と見なし、主が約束した土地を自分たちの故郷として手に入れたのである。彼らはその後、国民性と民族性を発展させていったのであるが、その手段は共通の言語、すなわち地理的に限定された地域でしか通用せず、共通の思い出と共同の運命を分かちもつ国民として自立させる言語であつた。

ユダヤ人たちは、自分たちの共通のルーツ (Ursprung) に基づいて、どこにいてもひとつの部族の構成員とし

て、すなわち部族としてはたしかに大きくなり、広く散らばつたものでありながらも、つねに一である部族の構成員として、自己を認識していたのである。この部族の構成員であることは、母親によって伝えられていく。つまり、個々のユダヤ人女性が生んだ子は、この部族の一員として認められるわけである。しかし、ユダヤ教に入信するか否かに関しては、出生のみに限られることはなかった。つまりユダヤ教への入信は、いつの時代でもすべての人に開かれていて、この部族の信仰を分かちもつ者は、この部族の一員として迎えられたのである。したがってユダヤ教に改宗した者は、イスラエルの子孫がもつ遺産と特権とを分かちもつ信仰仲間になるだけではなく、彼らのもつ重荷と苦しみをも引き受けることになる。

改宗者は、ユダヤの信仰を受け入れることによってユダヤ民族に歩調をあわせる。つまり、現在の宗教的義務と未来の精神的課題を受け入れることによって、同時に共通の過去にも結ばれることになるのである。

このような特殊性に光を当てて考えてみると、この

部族が、普遍のもつとも高貴な形態を映し出している、比類のない部族であることがわかる。つまり、イスラエルの信仰に内在している普遍主義は、その神学や未来のヴィジョンにおいてだけではなく、まさに民族の構成自体にも表れているのである。

たとえば、ユダヤ民族は「排他的」であると見られているけれども、しかしこの民族のなかにはあらゆる肌の色をもつ人々がいるし、文化的に多種多様な思想をもつ人々が属している。彼らの間にはさまざまな違いがあるにもかかわらず、また話される言語が多様であるにもかかわらず、ユダヤ人は自分たちを血族である⁽³⁾と見なし、共通のセム族出身の兄弟であると見なしている。この血族の意識はきわめて強く、ユダヤ人を統一するのが宗教であつても、またユダヤ人以外の人⁽⁴⁾がユダヤ教に改宗することで一員として迎えられたとしても、この意識は変わらない。それどころか、信仰に抵抗し、その信仰の根本や律法を拒否するユダヤ人⁽⁵⁾さえいるのであるが、しかし彼らもやはり一人のユダヤ人と見られるのである。彼らの方もまた、ほとんど

の場合、この共同体に結合していると感じているし、この部族の神秘的な力がなお測り知れないほど深いと思わせているものを感じている。

イスラエルは小さな民族であり、分割され別々にはなつたが、しかし後に引き下がるような民族ではなかった。この民族は孤独ではあつたけれども、孤立して⁽⁶⁾いるわけではなかった。つまりユダヤの歴史は、他のすべての国民や国の歴史と密接に関係していたのである。そこでエルンスト・ヴァン・デン・ハーグは、「ユダヤ人は、他の民族よりも強く人類の歴史と発展に関わり、より多くの影響を受け、またそこに根づき、それを進展させ、そしてなによりも苦しんだ」と述べている。キリスト教を基調とする社会の影響下にある西洋の学者が、ユダヤ人とユダヤ教の役割を間違つた光⁽⁷⁾のもとで見ようとし、ユダヤ人とユダヤ教が関わつたすべてのことに対して、いわば⁽⁸⁾懲罰無礼に扱おうとする傾向があつたけれども、しかしユダヤの歴史と他の世界とは、相互に影響しあつていたのである。

ユダヤ人とユダヤ教は、いつの時代にあつても否定

され、はねつけられ、認められず、迫害され、制限されてきたが、民族自体とその聖典は力を發揮し、その結果として、西洋の諸宗教、自然科学、医学、社会学の分野で、重要な革命的变化と進歩をもたらしたのである。創作のあらゆる分野、人間的知の發展、人間的苦悩の緩和、商業と経済の發展に対する個々のユダヤ人の貢献に関する文献は、各地の図書館にあふれている。さらには、ユダヤ人が社会正義を社会的行動によって強調するという伝統は、今日においても著しい影響力をもっている。

数のうえではそれほどいたことの無い民族、トラーの言葉を引用すれば、「あらゆる国民のなかでもっとも小さい」民族が、このような偉業をなし、また吸収あるいは壊滅させられようとしたけれども、世界史の舞台上に長い間立ちつづけてきた。しかしながら、このようなことが可能であったのには、民族それ自体がもつ能力として、なにか大きなものが背景にあったからにはほかならない。

マイモニデス (Moses Maimonides, 1135-1204)⁽³⁾ は、かつて初期の人類は、唯一にして真なる神を知っていたが、しかしこの神の知と信仰は、やがて消えてなくなってしまうと考えた。歴史研究者はおそらく、同様の信仰をすでももっていた人々が他にもいたという記録を発見するであろう。しかし、アブラハムが世界で最初の一神教信仰の創始者であると見なされている根拠は、彼が、精神的な砂漠において、その死とともに干上がって消えてしまうオアシスにたとえられる、一神教の創始者たちとはちがつて、自らの信仰の弘教に献身したからなのである。アブラハムはその信仰を息子のイサクに伝え、イサクはその子のヤコブ (イスラエル) に伝え、ヤコブはイスラエルの諸部族のそれぞれの父祖となった十二人の子に伝えた。ここから、イスラエルの歴史と全人類の歴史が流れ出ていくことになる。「なぜならわたしがアブラハムに特別に目を引いたのは、彼が息子たちとその子孫に主の道を守り、正義を行なうように命じるためである」(創世記、一八・一九)。

神の存在とその意志による世界の創造も、また神が

二 イスラエル——その神

「聞けイスラエルよ、主であるわれらの神、神は唯一の者である」(申命記、六・四)。この聖句は、唯一にして不可分である神が存在し、その意志によって宇宙とそこに含まれるすべてのものが創造されたという、イスラエルの深い信仰を表明している。

ヘブライ人アブラハムは、多神教と偶像崇拜を完全に捨てることによって、この一神教信仰を宣言する最初の人となった。そのことで彼は、ヘブライ人の父祖、あるいは後の世代によって呼ばれるように、イスラエル人・ユダヤ人の父祖となったのである。

しかしアブラハムは、この宗教的真理にしたがつて生きた最初の人間ではない。アブラハムが生を受ける前に、「神とともに生きた」義なる人、エノクとノアがいたことをトラーは伝えている。彼らも、唯一にして霊的な存在が実在することを信じ、《それ》を崇拜し、その意志にしたがつて生きていた。そのほかにも彼らのような人々がいたのかもしれない。モーゼス・

創造したものを成就するための神の配慮も、科学的に証明することは当然不可能である。

つまり、ユダヤ民族が頑固に固持している神的なるものについて、それが神のすべての属性、すなわち神の霊的本性や神の一性のすべての性質に関するものである限り、いかなる妥協も許されない。

「初めに、神は天地を創造された」(創世記、一・二)と、トラーの最初の聖句には述べられている。主は宇宙の神である。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(出エジプト記、二〇・二)。これはイスラエルへの歴史的啓示の機縁となった、十戒⁽⁴⁾を神が告示するさいの最初の聖句である。つまり宇宙の神は、イスラエルに自由をもたらし、自らへの従順を説いた神と同一の神なのである。

ユダヤの神とは、道德的な神、すなわち全人類に品行方正にして倫理的な生活と正義を要求する神である。ユダヤ人が祈るさい、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」、あるいは「イスラエルの神」という表現が用いら

れるが、それは神がユダヤ人だけの神であるとか、ユダヤ人に特別な神であるということの意味しているわけではない。さらにこのことは、神の支配が限られていることを示唆しているとか、他の民族には彼らを顧みる他の神々が存在していることを意味するように思われるかもしれない。しかし、「僕のお父さん」と語る子どもは、自分が語っている人が自分の兄弟や姉妹の父親でもあることを、否認したりはしないのである。

「イスラエルの神」という表現が意味しているのは、イスラエルが宇宙の神との結びつきに基づいていると信じている特別な関係、すなわち主がアブラハムと結び、後に民族としての精神的な放浪の旅をしている間、ずっとくりかえし更新され、確認されてきた契約なのである。われわれが「イスラエルの神」と語るのは、全人類が服従している、宇宙の神との契約を思い出すことにほかならない。

ユダヤ的神観念においては、神に身体性をもたせることは許されない。だから、トーラーに見られる「神の御顔」、「神の御手」、「神の御足」あるいは「神の玉

ユダヤ的神観念においては、神の靈性に関するいかなる妥協も認められない。同様に、人間が神になりうるとか、あるいは神が人間の形姿を受け取るという考えを、ユダヤの宗教精神は拒否する。つまり、ユダヤ的理解と信仰においては、無限なる神性が死すべきものの次元に限定されるという考えを、受け入れることは許されない。

そのうえ、神を具象的に描写することも、ユダヤ人には禁じられていた。十戒の第二戒、すなわち「あなたは像を造ってはならないし、描いてもならない……それらに向ってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」(出エジプト記、二〇・四・五)が意味するのは、崇拜者がその像を神であると信じていることに限らず、描かれた象徴としての神をその像に見ていることも含まれている。金の仔牛^⑥が罪であるのは、イスラエルの民が自分たちの神への信仰を突然否認したからではなく、主を偶像として表すことができると彼らが固執していたからである。

神について「われらが神」と語り、人間について

座」というような表現は、神の本来の性質を表す言語的可能性が他にない以上、象徴的に用いられているにすぎない。人間は、靈的世界のことがらを言葉で捉えることができないために、このような表現にならざるをえないのである。これについてタルムード^⑦の賢者たちは、「トーラーは人間の言葉で語る」といっている。この意味において、神の靈的性質は以下のように要約される。「主はつねに御力を振るわれ、自らの民を慈しみ、耐え抜くことを覚悟され、慈しみと真理に満ちあふれている主である。主の慈しみは幾千代にもおよび、冒瀆、罪、律法への背信を赦す。しかし主は(罪を悔いている者を)罰せず、(罪を悔いていない者を)罰する」(出エジプト記、三四・六・七)。この節は、「十三の属性」(midot)として知られているものであり、それが意味するところは、「ただ造られることのない神の愛と、永遠なる正義だけである。これは、神の本質としての本性を人間の言葉でもっとも高貴に表現したものとして、ユダヤ人の意識のなかに根づいてゐる」(J. H. Hertz im Kommentar zum Täglichen Gebetbuch)。

「神の子」と語るのは、主の道を歩んでいるすべての人間、またそれゆえに靈的な意味での主の子であるすべての人間を意味しているのである。

人間が獲得した技術的な成果、また人間の増しつづける能力、すなわち物理的な世界を支配し、しかも神の役割を疑ってしまう人間の能力をわれわれは利用するが、この成果は、無限なる者が人間に贈与した賜物の一部であるわけではない。神は人間を祝福し、語りかけた。「産めよ、増えよ、地を満たし地をあなたたちに従わせよ。そして海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(創世記、一・二八)と。

信仰深くして謙虚なる人が、このすばらしい偉業に見るのは、神の不在ではなく神の現存である。

天をあなたの指の業^{わざ}をわたしは仰ぎます。

月も、星も、あなたが配慮なさったもの。

そのあなたが御心に留めてくださるとは

人間とは何ものなのでしょう。

人の子とは何ものなのでしょう。

あなたが顧みてくださるとは……

あなたの御手の業を支配することをあなたは人間に授けられました……

主よ、わたしたちの主よ、

あなたの御名は全世界に満ちてなんと壮麗なことでしょう。(詩篇、八・四一〇)

信仰心をもたないで神を見る人は、自分自身を規定するいかなる法にもいかなる規則にも服従しない、全知なる人間であると自らを考えようとする。人間が、神の創造したすべてのもののなかでもっとも進歩を遂げたものであるのは、神から授けられた知性と精神的能力に基づいているからで、一般的な人間にしても、個別的にある特定の人間にしても、人間を崇拜することとは、偶像崇拜の最悪のかたちなのである。

天の王国の重荷を担うことは、かえって人間的支配や独裁の束縛から解かれることである。「あなたたちはわたしの僕となるべき人々であって、わたしの僕の僕になつてはならない」と神は語る。人間にはこの選択、

すなわち神に服従するか、人間に服従するかを選択が与えられている。ほとんどの人は、服従のこれら二つの形態の中間、すなわち神にも人間にも服従する形態を選ぶことができ、それでそれぞれの形態から解放されうらと思つてゐる。しかし、この希望的観測はつねに虚しいことがわかる。一方への服従の形態でないとしても、それはもう一方への服従の形態になつてしまふからである。ユダヤの民は、神への服従に決めたのである。

三 イスラエル——トーラー

生きている神への信仰の核心は、次のようなユダヤ的信条にある。すなわちそれは、主が自由意志で配置した被造物になんらかの方法で戒律と意図を伝え、そして自己に従順な僕であるように仕向けてゐることである。ユダヤ教のすべてのいとなみは、共同体としてのわれわれの先祖に与えた霊的体験の承認、およびその後のイスラエルの預言者たちに与えられる霊的啓示に基づいてゐる。通常では考えられない歴史的

出来事としてここで私が取り上げるのは、イスラエルの子らがエジプトから脱出した七週間後に、シナイ山の十戒が告知されたことである。神の意志は、モーセのエジプト脱出の後四十年の間、神の預言にもとづいて文字によつて書かれたトーラーにも啓示されている。『モーセ五書』(Pentateuch)のほかにも、神の意志は口伝えによるトーラーにも示されていると、われわれは考えてゐる。このトーラーもシナイ山にその起源があり、モーセはそこで啓示を受け、その後彼はイスラエルの宗教的指導者にもそれを教示した。

文字で記されたトーラー自体、伝承の口伝えの形態を参照するように指示している。そこに記された数多くの戒律を、口伝えによるトーラーがわかりやすく説き深めることによつて、世代から世代へと伝えられ、最終的には西暦二世紀までに書き留められ、タルムードの基礎を築いたのである。

こうした、トーラーを神の啓示としての起源とする伝統を重んじないユダヤ人は、トーラーを勢力のあつた人たちが靈感を得て書き留めたもの、すなわち神へ

近づきたいという人間の試みの記録にすぎないと考えた。この考えによれば、トーラーには永遠なるものも神的存在のものも存在しないことになるし、偉大な人たちにでさえ犯してしまう間違いが含まれてゐることになる。しかしながら、もしこのようなことがあるとしたら、トーラーが人間の行動や態度を対象とし、あるいは真理を具体的に表現することにおいて、アリストテレス、カントあるいはスピノザの倫理学よりも権威をもつてゐたのはなぜなのか。トーラーが人間によつて書かれた単なる道徳律であれば、自分の好みでない部分を取り除いたり、変更したり、改良したりする権限を誰もがつことになるであらうし、しかもこのことは、あらゆる世代や宗教的指導者の一時の欲望や気まぐれによつて起こることになつてしまふ。これこそがまさに、伝統を重んじない人たちがユダヤの慣習に挿し入れ、進めている変革を正当化するための、盾とされている解釈なのである。

神がイスラエルと預言者たちに与えた啓示の特殊なあり方を考えようとするなら、トーラーとは、神が人

間に近づこうとすることを書き留めたものであると理解できるだろう。そこにある種の不変的な価値や真理が備えられているのならば、トーラーを人間の精神的産物であるとみなすことは許されない。トーラーとはそのようなものではなく、神が、死すべき限りある人間に伝えた、自らの意志と見なされるべきである。ユダヤ教をいかに解釈しようとも、神がトーラーの源泉であることが認められていなければ、ユダヤ人の目になうことはない。

トーラーとは何か。機械的にいえば、それは『モーセ五書』を意味している。これは文字で記されたトーラー（成文律法・トーラー・シェビクター）である。それが書かれている羊皮紙の巻物は、シナゴークの聖櫃に保管されており、トーラーの巻物（セーフエル・トーラー）といわれている。ここである意味で留意しなければならぬことは、トーラーがユダヤ民族の根本法であるということである。しかしこの根本法は、人間によつて布告されたものではなく、神によつて啓示されたものである。トーラーには口伝によるトーラー（口

伝律法・トーラー・シェベアル・ベ）も含まれているが、それによれば、「モーセが律法を授かりシナイ山からモーセはヨシヤに伝え、ヨシヤは長老たちに、長老たちは預言者たちに、預言者たちは大会堂の人々に伝えた」（『ビルケー・アヴォート（父祖の章）一・一』）とされている。

口伝による教えには、戒律の一つひとつの細かい点、すなわちトーラーの普遍的諸原理や戒律が、いかに適用されるべきかという方法が含まれている。たとえば、トーラーはシャバットの「労働」を禁じている。しかし「労働」とは何を意味しているのか。シャバットに関する律法の観点から見ると、「労働」の概念はいかに定義されるのか。これに関して成文による教えには、たとえば薪を拾ったり、火を熾したり、料理やパンを焼いたりするようなことを除いては何も述べていないが、口伝による教えには述べられている。成文律法は、食料として用いられる動物を、「わたしがあなたに命じたように」殺すことを命じている。この蓄殺はいかになされるべきなのか。そのさい、いかなる法規が適用

されるべきなのか。これに関して成文律法は何も言及していないが、口伝律法は言及している。成文律法はさまざまな犯罪に対する死刑を定めているが、死刑が下される前に、いかなる法的規定や手続きがなされるべきなのか。境界線はどこにあるのか。これらのことについて、成文律法には言及されていないが、口伝律法には言及されている。

口伝律法は最終的には成文化された。西暦二世紀の間に、後にゲマラの基礎をなすことになるミシュナーにまとめられたのである。ゲマラは、包括的な記録文書とさまざまなケースに関する議論や、賢者たちが行った法律討論の議事録から構成されている。ミシュナーとゲマラとで、タルムードは形成されている。

したがって、成文によるものであっても口伝によるものであっても、トーラーは、人間にいかにかに生きるべきかを命ずる教えなのである。それはおもにイスラエルに語られたものであるけれども、すべての人間に対する教導もそこには見出される。つまりトーラーは、人間の生活のあらゆる側面に関わっているのである。

通常「宗教的」と見なされている祭儀的な諸法規は、戒律全体のほんの一部にすぎない。トーラーの戒律、その規約や規則には、人間的・社会的行動ないし態度のすべての領域が包括的に収められている。トーラーがその裁判権を有効にする範囲は、他の宗教が倫理的ないし道徳的であるとした領域、あるいは民法や刑法が管轄するところまで及んでいる。それどころか、トーラーにおける法的でない部分や規約を含まないものも霊的真理を重視し、しかも法的ではない行動基準、すなわち倫理的・道徳的行動基準の一つひとつを提示しているのである。

ヘブライ語聖書の他の部分（すなわち『モーセ五書』以外の部分）は、数世紀にわたって書かれた、預言者（ネビーイム）と諸書（ケトウビーム）によつて構成されている。これらの書には、七百年に及ぶユダヤの歴史に登場してくる預言者の教えが含まれている。これらの書が伝えるのは、預言者たちの見神体験であり、さらにはトーラーの教えに民衆をより強く従わせるために、彼らが行った長きにわたる闘い、すなわち民衆を

ときに唆し、神とトーラーに背かせる偽預言者や偽祭司との闘いである。靈感を与えられて書かれ、人間のもつとも深い宗教的感情が反映されている『詩篇』は、これらの書の一つである。

トーラーは、ネビーイームとケトゥービームを合わせて、タナハと呼ばれる（ユダヤ人以外の人にはこれを『旧約聖書』と呼ぶが、しかしこれは、ユダヤ人にとってはやはり唯一の聖書なのである）。しかしもつとも広く解釈すれば、トーラー研究とは、成文と口伝による教えを研究することだけではなく、ラビが行った立法において、トーラーに基づくすべてのテーマや、そのテーマが数世紀にわたっていかに発展してきたのかを解釈することでもある。というのはトーラーは、人間によってとくに変わる現実的な諸条件に適用される、常に生きていく法だったからである。この解釈は、人間の努力の成果と呼ばなければならないとは思いますが、トーラー自体が権威ある立場であると認めている、宗教裁判のテーマ全体の不可欠要素なのである。すなわち、「彼らがあなたに神が選ぶあの場所から告げるであろう言葉の

のすべての哲学的基礎と同様、ハラハーのなかに明確に表れている。ハラハーとは、ユダヤ法に関する一般的表现であるが、個別的問題についても、その最終的にして権威的な決定という意味をもっている。

ハラハーは第一に、成文および口伝律法の聖書の教義と戒律が基礎になっており、それに加えてラビが行った立法や指令に基づいている。そこには、偉大なラビである学者が応答したり注釈する形式で、時代を跨いで書き留められた宗教史的判決も含まれている。これらはすべて権威として、現在にまで続いている宗教史的判決の訴訟の法的先例となっている。

ハラハーという言葉の意味は、「歩むべき道」である。ハラハーは実践であって、理論ではない。法であって、哲学ではない。ハラハーは信仰を土台として発展してきたが、もつとも強調されるのは行為である。いかなる場面、状況にあっても、戒律をいかに正しく適用するかということに関わっている（聖書を起源とする戒律は本質的に不変であるが、ラビを起源とするものはなんらかの事情や条件のもとで、権威と権限をもつ学者によって修正さ

表明にしたがって行為しなければならない。彼らがあなたに教えることすべてにしたがって忠実に実行しなければならぬ。彼らがあなたに教える教えの表明にしたがって、また彼らがあなたに告げる正義にしたがって、あなたの行いを築かなくてはならない。彼らがあなたに告げる言葉から右にも左にも逸れてはならない（申命記、一七・一二）とあるように。

トーラーはユダヤの信仰の具体的表現である。トーラーには、ユダヤ民族と神との契約の諸条件が含まれている。すなわちトーラーとは、ユダヤ人がユダヤ人になるためのものである。

四 ハラハー——ユダヤの道

ユダヤ教では、信仰箇条と宗教理論はなんらかの行為と切り離すことはできない。ユダヤ教神学は、その大部分がハラハー⁽¹⁾、すなわち理論ではなくおもに実践に関わるユダヤの法体系に収められている。ユダヤ教は、二重の原理、すなわち神の超越性と個人の聖性に基づいているとよくいわれるが、ユダヤ教の哲学はそ

れることもある。

ハラハーは倫理的責務と宗教的義務を扱っている。ユダヤの法体系としてのハラハーには、生活のあらゆる観点と、それが人間同士であれ人間と神との間のものであれ、あらゆる関連が収められている。したがって、ハラハーが取り扱うのは、一般に祭儀や宗教に属するものと見なされている領域だけではなく、ユダヤ人以外の学者が、通常、道徳や倫理あるいは民法や刑法に属するものと見なしている領域にまで及んでいる。ハラハーにはすべてが含まれているといえる。すなわち、ユダヤの宗教にはすべてが含まれているともいえない。人間の行動領域において、ハラハーが関わらないあるいは指示しない領域はない。

生活のあらゆる観点で、その基準としてハラハーに従っているとすれば、ユダヤの宗教が——それが正しく理解されるなら——生活の多くの部分の一つだけを満たしているとは見なすことも、他の領域や関心から分離したものと見なすこともできない。ひとりの人の食、事の習慣、性生活、仕事上の倫理、社会生活、娯楽、

芸術的活動、これらはすべて宗教法の支配下にあり、宗教的価値、ユダヤ教の精神的基準に則っているのである。ユダヤの宗教は、生活のいかなる領域からも切り離すことはできないし、超自然の世界での神秘的な意味をもつ、祭儀行為だけを満たしているわけではない。ユダヤの宗教を十分にそして厳密に研究するならば、以下のことがあきらかになるであろう。すなわち、ユダヤの宗教は生活それ自体であること、そして生活のすべての基準となる価値を授けるということである。

以上に述べたことは、宗教的伝統がユダヤ人に与えた特質に一致する。この理由から、預言者たちはシャバットを聖なるものとし、偶像崇拜の撤廃を求め、同様に社会正義のため、そして貧困をなくすために闘ったのである。ユダヤ教に関するすべての書物が強調しているのは、ユダヤ教が生活法であるという事実、そしてユダヤ教は行為を意味し、信仰のみに関わっているのではないという事実である。信仰理論が果たす中心的役割を無視することはできないが、力点はあくまでも行為に置かれる。ユダヤの信仰の理念において遵

守されてきたのは、信仰理論や解説ではなく、トーラーの実践的適用なのである。

概念的真理やその価値は、それが生活法に应用されなければ、ほとんど意味のないものと同然である。ハラハーは、日常生活のなかで適用されるべき方法であり、概念であり、価値なのである。それは、理論、原理、信仰を具体化させる道を指し示すものである。ハラハーは、戒律を適用し、履行することに焦点が置かれているので、抽象世界にあるものを具体化し、世俗世界にあるものを聖化することを、同時に可能にさせる。それは、ユダヤ的生活法を保護し永続させるため、ユダヤ的あり方なのである。

もしハラハーが守られなかったり拒絶されたならば、ユダヤ的生活法は次第に消え去ってしまうだろう。さらに、ユダヤ的生活法が消滅していくにしたがって、ユダヤ教のなかで保持されてきた独自の価値も、次第に消え去ってしまうだろう。これは突然に起こることではない。つまり、一世代あるいは二世代にわたるかもしれないが、起こりうることである。このプロセス

は同化と呼ばれる。ハラハーのもつ拘束的な性格が顧みられなくなったときにこのプロセスは始まり、ユダヤ教が消滅することでこのプロセスは終わる。これは論争に関わる問題ではなく、多くの条件や状況のもとで残念ながら再三再四繰り返されてきた、歴史的事実に関わる問題なのである。ユダヤ教が完全に無視され、てしまったところでは、さし迫る反ユダヤ的危機は、ただユダヤ民族の肉体的同化に関わるものでしかない。

五 「隣人をあなた自身のように愛しなさい」――

ユダヤ的生活における倫理と

道徳のライトモチーフ

ここで、隣人愛のユダヤ的世界へと眼を転じてみよう。「隣人をあなた自身のように愛しなさい」との聖句は、人間的振る舞いに関するユダヤ教の体系全体の基礎となっている。したがってこの聖句は、ユダヤ的倫理と道徳に関することを述べるにあたつての、適切なテーマだといえる。この聖句がいかに重要であるかを、

タルムードの有名な物語は以下のように説明している。⁽¹⁵⁾

「このようなことが起こった。偉大なる教師シャンマイの前を一人の異邦人が通り、彼にこう言った。『私が一本足で立っている間に、あなたが私にトーラー全体（トラーとは聖書の最初にある五つの書の名前であるが、ユダヤの教え全体の総称でもある）を教えるという条件で、私をユダヤ教に改宗させてみよう』と。するとシャンマイは、手に持っていた物差しでその異邦人を突き飛ばした。それでその異邦人はヒレル⁽¹⁶⁾の方へ行き、彼に言った。『私が一本足で立っている間に、すべてのトーラーを教えよ。』ヒレルは答えた。『あなたにとって好ましくないことを隣人にやっではないけない。これがトーラーのすべてであり、他のものはすべて解説にすぎない。行つてこれを学びなさい。』そしてその異邦人は、ユダヤ教に改宗した」と。

ヒレルの言葉、「あなたにとって好ましくないことを隣人にやっではないけない」は、「隣人をあなた自身のように愛しなさい」の裏返しである。隣人愛は倫理と道徳に関するユダヤ的体系の土台であるというと、非常

に驚くかもしれない。しかしここで考えてみなければならぬことは、隣人を自分自身のように愛するというのは、厳密にいつて何を意味しているのかという問いなのである。私たちは偽ってはいらない。つまり、私たちの利己的愛は非常に強いのである。そうであるならば、他者を自分自身のように本当に愛することが出来るのだろうか。この問いに対して、もう一つの問いを立てることで答えよう。ヒレルは、なぜ異邦人に、「隣人をあなた自身のように愛しなさい」と直接的に答えなかったのか。彼はなぜ、「あなたにとつて好ましくないことを隣人にやってはいけない」という、ネガティブな表現を用いたのだろうか。

「隣人をあなた自身のように愛しなさい」との聖句から、量的関連を読み取ることも可能である。つまり、私たちが自身自身を愛する同程度に、すべての人を愛することが義務づけられているということである。しかしこれは、ほとんど不可能である。これに対し、ヒレルのネガティブな表現によつて、この命令の質的な意味を理解することが出来るのである。

して定義しているのを知ることになる。
十一世紀に生きた、もつとも偉大な学者の一人であるマイモニデスは、隣人愛に関して何が重要なのかを具体的に記述している。すなわち、病人を見舞うこと、嘆き悲しんでいる人を慰めること、貧しき娘たちが結婚できるように嫁入り支度をする、通りすがりの旅人を気遣うこと、死者の葬儀に必要なことすべてをすること、結婚式の若い新郎新婦を祝福することである (Hilchos Avel, 14)。以上のことは、個人として自分ひとりで果たさなければならぬ、限度のない愛の行爲なのである。

十九世紀にドイツで活躍したラビ、ヤコブ・ツヴィ・メクレンブルクは、隣人愛の戒律をいかに実行するか基準について、追加リストをあげている。すなわち、「あなたの友人に対しては誠実であるべきであり、偽りなく接するべきであり、尊敬の念を以つて行動せよ。友人が幸福であるかを尋ねよ、友人と悲しみを共にせよ、友人には親切にせよ、友人の有利になるように判断せよ、友人のためになるように努める覚悟をせよ」

約百五十年前、フランクフルトのラビであったサムソン・ラファエル・ヒルシュは、この命令の意味内容をより詳しく解説している。すなわち彼によれば、「あなたの隣人を愛せよ」とは、「同胞の人格を愛せよ」ということではなく、「同胞の幸福をあなたのもののように愛せよ」ということである。同胞が嘆き悲しんでいたら、その苦しみを嘆くべきであり、同胞の幸福を自らの幸福のように喜ぶべきである。自らの幸福がもつ同じ喜びを以つて、同胞の幸福に寄与すべきである。さらに自分自身が苦しんでいるときのように、同胞から苦しみを取り除くべきである。友人の幸福を自分自身の幸福の条件と見なすならば、また他者の成功を自分自身の障害であると思わないならば、私たちは、質的な意味で隣人を愛していることを知るのである。

この定義は非常に美しく、非常に理想的に聞こえる。しかしその一方で、この定義の意味することは何なのか。この隣人愛の定義を、いかに実践に移すことが出来るのだろうか。以下において私たちは、ユダヤ的世界観が、隣人愛を非常に実践的に、実行可能なものと

よ、友人が必要としているものがあれば、それを貸す準備をなせ」である。たとえば、友人に対して自分自身を愛するように愛することが求められていなくても、それでもこのリストはたいへん刺激的である。隣人愛の戒律を実行するためには、多くのことが私たちに求められているのだ。
ところで神はなぜ、そもそも私たちが隣人のことを気にかけ、よいときも悪いときも隣人を助けることを欲するのか。

1. 私たちは、人間一人一人が神の似像として造られたことを知っている。隣人に愛を以つて接するならば、それは自動的に神に対する私たちの愛を示すことになる。

2. 隣人愛の戒律が含まれている聖句が、次のように述べていることを忘れてはならない。すなわち、「私、神は、あなたに報復しない。あなたの民の息子たちを恨んだりしない。あなたの隣人の幸福をあなたのと同じように愛する」と。強調されるべ

きは、「私、神は」である。神と神の教導がなければ、私たちは友人にいかにか接したらいのかかわからず、戸惑ってしまうだろう。人間の法体系は、そこに神に関することが含まれていないならば、歴史の表舞台に長く立ちつづけることはないであろう。何が嘲笑の代わりに人間の法体系を正義から造ったのかを、私たちは知っている。まさに、人間の法体系に神が居合わせていないならば、隣人愛は十分に強固なる土台をもつことはないであろう。

なぜ隣人愛の戒律は実行されるに値するのか、これに関してもう一つの理由がある。すなわちそれは、詩篇(二二・五)¹⁷にあるように、主は私たちを覆う陰であるということである。この比喻はいかに理解できるだろうか。私たちがするすべてのことを私たちの陰がするように、私たちが友人に接するように神は私たちに接する。私たちが神に対して寛大であるならば、神は私たちに対しても寛大なのである。

る。同様に、不正、残虐的行為、不誠実、詐称、不親切な行為、神への背反も、人間に対する犯罪に関して適用される。これらの行為は重い宗教的罪と見なされ、それどころか祭儀に反する行為よりも重大な罪となる。

「もし誰かが口伝・成文による教えを学び、賢者に仕え、誠実に仕事をし、他者についていねいに語りかけるならば、その者は何と言われるだろうか。幸いなるかな、その者にトーラーを教えた父(と教師)は、この者がトーラーを学ぶことにより、その者の道がいかに高いものであるか、その者の行為がいかに正しいものであるかを見るであろう。それに対し、ある者がトーラーを学び、賢者に仕えるが、しかし誠実に仕事をせず、礼儀を弁えず人に接していたならば、その者は何と言われるだろうか。トーラーを学んだ者はただですまないぞ! この者にトーラーを教えた父もただですまないぞ! 見よ、その者の行為はなんと腐敗しているのか、その者の道はなんと惨めなものか!」(ヨ一マ篇、八六)。もし、信仰心の篤い学者ないしは法に

ユダヤの信仰と祭儀の遵守は、何よりも人間関係を完全なものにし、よりよい社会を造ることにであると私たちは考えているから、ユダヤの日常生活を導く最初の言葉は、すべて善行に関して語られているのである。

「善良なる心」は、本来に敬虔で法に忠実なユダヤ人にとっては、タルムードの必要条件なのである。数え切れないほどのことがらに、現われうる「善良なる心」が欠如していることは、個人としての宗教的な完全性に欠陥があるということである。下心なしになされる倫理的行為、善意による行為あるいは隣人愛の行為は、それが神の意志であるという信仰のなかにのみあるのならば、宗教的活動のカテゴリーに無条件に属しているのであり、宗教的戒律を履行しているのである。その行為は精神的充足を授けるのであるから、正当なる宗教的体験である。

タルムードは、「ひたすら信心と聖なるものを求めている者は、民の法を果たしていなければならない」(バヴァ・カマ篇、三〇a)と記述している。ユダヤの法は、財政法、市民法、刑法に関するものも取り扱うのであ

忠実な人が、言葉にそのかされて行動するならば、それは神の名の神聖さを奪い去ることと見なされ、もつとも重い精神的罪の一つに数えられることになる。

神の価値秩序を強調するために、タルムードの道標は次のように教えている。「人が最後の審判に望む前には最初に問われることは、『汝は正直にそして忠実にやってきたのか』である」(シャバット篇、三一a)。

神の道を歩めという聖書の呼びかけは、もつとも早い時期から、神の本性としての同情と善行を模倣せよという、人間への呼びかけと見なされてきた。「神はあなたに語る、何が善いのかと。主があなたに求めるもの、それは正しく振舞い、善を愛し、へりくだって神とともに歩むこと」(ミシュナー、六・八)。

正義、同情、善行を長い間強調しつづけることは、なんらかの結果を伴うことである。すなわち同情と社会正義は、紀元前からすでに長い間、ユダヤの共同体生活における決定的特徴となり、数世紀にわたって存続しつづけてきたのである。

古代哲学においては、四つの枢要徳、すなわち勇気、

正義、知恵、節制が賞賛された。それに対してユダヤの倫理においては、寛大さ、同情、共感、憐れみの本性が尊重される。人間の創造主に対する関係に関する戒律のユダヤ法的全領域と、人間同士の関係に関する全領域とは、分割することが可能であるが、これら二つの領域は、重なり合うことがよくある。むしろ、ユダヤ教の祭儀を遵守する個人の、倫理・道徳的本性の完成に多くの人の目的がある以上は、祭儀的戒律は、倫理的結果を必然的に伴うように思える。多くの聖書註解者たちは、乳と肉を混ぜたり、血を食べることを禁止することを、倫理的基礎であると考えてきた。祭儀の遵守自体がこの目的に寄与していないところでは、賢者たちは、道徳的基準や倫理的価値を強調するのに意義のある解釈を施すことが、頻繁にあったのである（たとえば、過ぎ越しの祭り（ペサハ）のためにパン種を取り除くことに関していえば、それはパン種を思い上がりで傲慢に同一視し、ユダヤ人を諷め、これをまた取り除くきっかけとなった）。

行動模範は、それが単に象徴的あるいは哲学的抽象

愛を象徴する戒律を履行するのに、欠かすことのできないものなのだ。ある人が、どちらか一方なしでもやっていたと思うても、結局は両方とも担うことはできないのである。

訳者後記

本論の訳出にさいし、東京大学の市川裕氏にはヘブライ語の訳等に関して、たいへん参考になるご教示を承った。この場をかりて感謝の意を表したい。

訳注

- (1) 西暦とはキリスト暦であるから、ここでは便宜的に使われている。ユダヤ暦によれば、今年（二〇〇四年）は神の天地創造から数えて、五七六四年にあたる。
- (2) ヘブライ語の動詞「教示する」に由来し、「律法」「教え」を意味する。狭義的には、ヘブライ語聖書（いわゆる旧約聖書）の最初の五書、すなわち「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」を指すが、広義においては、著者も「根本法」(Verfassung)と述べているように、ユダヤ民族の生活法規一般に対する総称である。

に起因する場合よりも、具体的に日常的な行為に結びついている場合の方がよく定着できるということは、心理学的真理として適用される。ユダヤ教の倫理的命令とその価値は、おそらく祭儀的基礎によって、まさにその力と歴史的持続を維持してきたのであろう。したがって、倫理と性格教育の発展における祭儀の基本的役割は、過小評価されるべきではないと思われる。

ユダヤ教において常に現実的なテーマは、善行の生活、すなわち「人間の眼から見ても善いこと、そして神の眼から見ても善いことを行うこと」(Sifre Deut. 12:29)を求めることである。聖性というこの目標が理解されなければ、ユダヤ教を理解することはできないし、ユダヤ教の生き方をするとはできない。誠実と正義の倫理を食物規定（カシュルット）とシャバットの領域から切り離したり、同情と慈しみの心を宗教的家族生活の道徳から切り離してしまつたら、ユダヤ教は理解されないし、ユダヤ教の生き方をするとはできない。神の愛と人間への愛を分離することはできない。人間愛を実行に移すという戒律を履行することは、神への

- (3) 中世ユダヤ教の最大の哲学者、医者である。ユダヤ教神学とアリストテレス哲学との総合を試みた。著書には、『迷える人々の導き』、『ミシユネー・トーラー』がある。
- (4) 「出エジプト記」第二十章には次のようにある。

1 あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。

2 あなたはいかなる像も造つてはならない。

3 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。

4 シャバットを心に留め、これを聖別せよ。

5 あなたの父母を敬え。

6 殺してはならない。

7 姦淫してはならない。

8 盗んではならない。

9 隣人に関して偽証してはならない。

- (5) 隣人の家を欲してはならない。
- (6) ヘブライ語で「学習」あるいは「教え」という意味で、ユダヤ人の律法と伝承の集大成。ミシユナーとゲマラによって構成されている。

(6) 出エジプト記第三十二章によれば、モーセが留守の間に民衆が神に見立てて造った像のこと。それを知ったモーセは怒り、「イスラエルの神、主がこう言われる。『おのおの、剣を帯び、宿営を入り口から入り口まで行き巡って、おのおの自分の兄弟、友、隣人を殺せ』』と命じた。これによって約三千人が死んだと聖書は伝える。

ている。

(7) ヘブライ語で安息日のこと。ユダヤ教においては、金曜日の日没から土曜日の日没までの間。

(8) 「薪を拾ってはならない」に関して、聖書は次のように記している。「また火が主のもとから出て、香をささげた二百五十人を焼き尽くした」(民数記、一六・二三)と。「火を熾してはならない」に関しては、「安息日には、あなたたちの住まいのどこでも火をたいてはならない」(出エジプト記、三五・三)と。「料理をしてはならない」に関しては、「モーセは彼らに言った。『これは、主が仰せられたことである。明日は休息の日、主の聖なる安息日である。焼くものは焼き、煮るものは煮て、余った分は明日の朝まで蓄えておきなさい』」(出エジプト記、一六・二三)とある。

(9) アラム語で「完全」を意味する。ミシュナーを基礎とするラビの討論・注釈であり、ミシュナーとともにタルムードを形成する。

(10) 紀元前三〇〇年から紀元後二〇〇年まで、約五〇〇年にわたり、成文化され編纂された口伝律法の集大成であり、その起源はモーセと預言者たちにさかのぼり、タルムードを形成する。ミシュナーは以下の六つの巻に分かれる。

- 1 ズライーム (種子) の巻
- 2 モエード (季節) の巻
- 3 ナシーム (婦人) の巻

4 ネズイキーン (損害) の巻

5 コダシーム (聖物) の巻

6 トホロート (清潔) の巻。

(11) ヘブライ語聖書は、大きく三つに分かれている。第一区分が律法、第二区分がこの「預言者」である。預言者のなかでも三大預言者といわれているのが、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルである。ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ、ナホム、ハバクク、ゼファニヤ、ハガイ、ゼカリヤ、マラキは、十二証言者といわれる。なお、イザヤ書は第三十九章までがイザヤ自身の預言であるとされ、第四十章から五十五章までは、紀元前六世紀に別の人によって書かれたものであるとされ、「第二イザヤ書」といわれる。後の六十六章までは、紀元前六世紀から五世紀にわたって書かれたものとされ、「第三イザヤ書」といわれている。

(12) ヘブライ語聖書の第三区分にあたる。「ケトゥービーム」とは、ヘブライ語で「書かれたもの」(複数形)を意味する。すなわち、詩篇、ヨブ記、箴言、雅歌、コレヘトの言葉、エステル記、ダニエル記、エズラ記、歴代誌等を指す。

(13) ヘブライ語で「わたしの偉いなる者」の意味で、ユダヤ教においては「教師」を指す。

(14) ヘブライ語で「歩く」に由来し、宗教法的伝承に関わる法規の部分等を指す。

(15) 生没年およびその生涯については不明。ヒレルと対の、

五組のズゴート (一対) の最後の一人とされるユダヤ人出身の賢者。ヒレルに対して、シャンマイは厳格な学者といわれている。

(16) バビロニア出身でエルサレムで活動した賢者。シャンマイに対しては常に寛大であったといわれている。

(17) 「主はあなたを見守る方
あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。」

(ステイーヴン・E・ラングナス／ユダヤ教ラビ)
(訳・やまざき たつや／東洋哲学研究所研究員)